

豊かな感性と表現する力を養う図画工作の教材研究 ～楽しく遊べるダンボールハウス共同制作の取り組み～

土屋明之¹⁾

A Study of Teaching Materials which Develop Great Sensitivity and Expressive Ability in Drawing and Crafts — Grappling with the Co-production of a Corrugated House in which Children can Play and Enjoy Cheefully —

Akiyuki TSUCHIYA

保育園や幼稚園で造形遊び等の活動を通して子どもたちが様々な素材のおもしろさやその特長による表現の仕方を発見し自分で感じたことや考えたことを友達同士楽しみながら物を作ることで楽しい園生活ができることを保育士として期待するものである。本学の学生においては、子どもたちの願いを具現化するため「ダンボールハウス」制作演習を通して、現場での実践力の向上をねらいとした。自ら体験し制作することがおもしろいと感じること、考えたことを具体的な形に表現する楽しさを味わうことで、保育士として造形表現の実践力につなげられるものと確信している。この取り組みでは、ダンボールの持つ素材や教材価値を理解し工作する仕方等に気づくことで、より造形スキルを高め、共同制作することにより保育における造形表現の意義を互いに確認し合い、イメージを共有し、より具体的に工夫することができ、ものづくりの楽しさや完成させた成就感を味わうことができた。

キーワード：見たて造形遊び、ダンボール素材、共同制作、成就感、おもしろいと思える状況

1 はじめに

長年特別支援学校に携わり、特に美術教師として障がいのある子どもと共に造形活動を行ってきた。その中で子どもたちと一緒に感動体験をし「おもしろい！」と自らが感じ取ることができ、さらに、日常にある何気ないものに障がいのある子どもたちが描いたり手を加えることによりもう一つの新たな価値のある作品が生まれるおもしろさを経験した。

そのことは、障がいのある無しに関わらず子どもたちが日常の中で、様々な体験を通して感動したことや感じたことを素直に表現したいと言う強い思いからくるものであり、保育者は、子どもたちが感動

しおもしろいと思える状況を用意しなければならないと考える。

個々での取り組みは、共同制作の「ダンボールハウス」制作を通してものづくりの過程を経験することで表現する楽しさを味わい、主体的な活動ができる具体的な支援を探るものである。

2 描画アンケートによる学生の実態

毎年1年生の「図画工作」の授業の4月最初に造形表現に関わる様子を知るために簡易のアンケートを実施している。その内容は、「この空白にあなたは何を描きますか」と、自由な発想で画材はボール

1) 短期大学部幼児教育学科

ペンやシャープペンシル等持参したもので落書き(イラスト)をするように求めたアンケートを実施した。

なお、アンケートのデータについては、過去4年間368人を対象としたものである。

この自由に絵を描くことを求めるアンケートについては、落書きの発想で捉えるこきる。

数値的な集計に対しては、描かれた人一人、動物一匹、花一輪を1ポイントとし、1人で複数の数値的な集計に対しては、描かれた人一人、動物一匹、花一輪を1ポイントとし、1人で複数の描画も可とした。(図1)

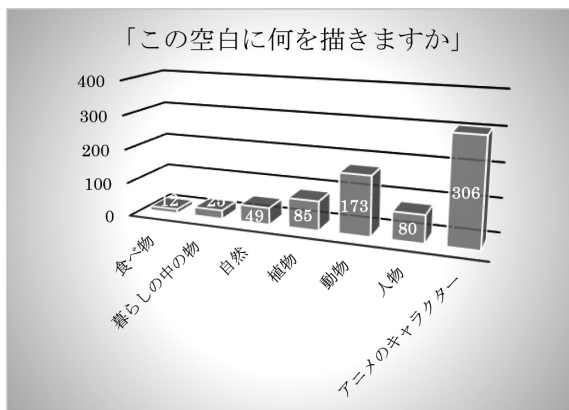


図1 落書きされたもの

一番多く描かれた題材は、幼い頃から目にしたアニメーション映画およびアニメーションテレビ組等の漫画キャラクターであった。特にアンパンマンは圧倒的な多さで描かれた。円を中心とした描画がたやすいことから一般的に広く親しまれていることがここでもいえる。

次に多かったキャラクターは、藤子・F・不二雄作による児童漫画の『ドラエもん』であった。

両キャラクターの特徴として、丸顔であることが小さな子供から大人まで簡単に描くことができそのキャラクターの個性を表現し易いことである。また、描画発達の点から見れば丸を中心とした表現は、2歳ごろから現われる「頭足人」や「太陽人」と言われる人物表現に類似している。それであるから人間の持つ球体に対する愛着から来る表現であると断定することは避けたいが、円や球体に対する丸みのある形を多くの方が好むことは確かである。清水侑子原作(1974年)の日本を代表するマスコットキャラクターである『キティーちゃん(通称)』につい

ても、丸を中心とした猫をモチーフに擬人化した単純な形の構成となっているため描きやすいことも考えられる。

他に描かれたキャラクターは、スヌーピー(アメリカの漫画家、チャールズ・モンロー・シュルツ作)、ミッキーマウス(アメリカの漫画家、ウォルトディズニー作)、バイキンマン(漫画家、やなせたかし作)であり、図1で2番目に多かった動物では、クマ、ウサギで意外と身近な犬や猫ではなかった。

興味深いのは、描かれた背景に多く添えられてあったのが5・6歳の子どもの絵画作品によく見られる単純化した図柄の木や花でありその上部には太陽が描かれていることであった。

これらのアンケートの結果をどのように見るかを詳しく分析するのは次回としたいが、実践対象の学生は、幼い子どもたちが落書きするようなキャラクターばかりを描き稚拙で非常に想像力に乏しいと捉えるかの判断は難しい。が、学校教育の教科という点で見れば、中学校まで図工・美術があり高校では選択による芸術科目となりほとんどが音楽、書道を履修し、美術選択者は1パーセントに過ぎない現状であり、ましてや美術部で取り組んだ経験者は、1名であることから美術に対する興味関心は非常に低いことが見られる。

ここで求めるものは造形スキルの向上や結果を意識した作品作りではなく、保育士として担当する子どもたちの日常の遊びを中心として見たり聞いたり動いたりする中でおもしろいと感じることができる表現活動の支援が重要と捉える。であるなら、落書き課題に対して抵抗も無く素直に様々な絵を学生たちが描いたことは非常に前向きで重要なことだと考える。

2 目的

将来現場における保育士としてまた保育教諭指導者として身に着けなければならないものとして、子どもたちが生活や遊びの中で、興味あることや経験したこと等を自分なりに造形表現を通して豊かな感性を養うことができるよう支援ができることであるとする。

ここでの取り組みは、身近な造形素材であるダンボールを用いた図画工作を通して学生自身の感性を

高め、より実践的な教材の扱いや造形スキルと指導力向上を図るものであることは言うまでも無いが、子どもたちの生き生きとした表現を引き出す支援の一つとして、日常の中で子どもが自らの感性に基づき気づきおもしろいと思える状況づくりをすること、子どもの様々な気持ちや感動に共感ができ、保育士自分自身がおもしろいと感じて共に活動できることを期待するものである。

3 内容

(1) 実践の場：「図画工作」を通して

授業単位が1学年2クラス編制で実施。1クラス50人前後の集団での取り組みのため、共同制作単位を1グループ5人から6人の9グループとした。2クラスあわせて18グループの編制となり、ダンボールハウスとしては18作品を制作した。

この単元は、計画から制作、完成、展示までの授業として8回（1回90分）実施をした。

(2) 工程表の作成

ダンボールハウスのコンセプト検討→イメージスケッチ→材料計画制作→主構造制作→ディテール制作→チェック（修正と検討）→完成→ディスプレイと反省

(3) 教材の価値

ア ごっこ遊びとして

子どもの成長にとって日常の中で心を動かす出来事などに触れ感じる思いを表現したり、その活動を友達同士で楽しんだりする事は、意欲を待った主体的な生活につながると考える。造形表現で主体的に取り組める題材を考える上で子どもの発達の観点から「つもり」、「見立て」、「ごっこ」等の遊びが大きなキーワードとなる。

想像力を使いイメージを広げ友達と同じ空間を共有して「ごっこ遊び」をするようになることは幼児期の成長の重要な過程であり、木っ端が乗り物になったり、棒切れがテレビの中のヒーローが持つアイテムになったりし、ダンボールの空間が子どもたちの取り巻く社会の中心として機能するに大切な象徴遊びとなりうる考える。

今回取り組むダンボールハウスは、大学生自信にとりごっこ遊びの重要性が認識でき、想像力を耕すことができる教材だと考える。

イ 素材としてのダンボール

子どもたちにとって日常生活の中によく目にしたり触れることの多いダンボールは、梱包材として広く使われ使用後はリサイクルごみとして扱われているが視点を変えれば、紙でできているにも拘らず厚みがあり構造的にも強くできており、軽くて、ハサミやカッターナイフで切ることができ、クレヨンや水彩絵の具で自由に絵を描く事が可能である。しかも、ぶついたりたたいたりしても怪我をすることがない安全な素材である。まさに子どもたちにとって大きさも様々でありいろいろなものに見立てることができる嬉しい最善の素材である。

4 各グループでの実践

(1) 事例1『サンタの家』(図2)

ア 教材としての工夫

季節の行事の中で広く取り組まれているクリスマスをテーマとして家を表現した。発想の点では「いつもプレゼントを運んでくれるサンタはいったいどんな家に住んでいるだろう」という子どもの素直な疑問に答える形でのものである。



図2 サンタの家

円筒形を基本とし屋根を円錐の形態とした。屋根については長方形のダンボールを丸めたためとがり帽のイメージとなりさらに赤色に彩色し綿を頭頂部につけることでサンタの帽子や赤い服のイメージがより強調された。カラーセロハン紙による窓を複数設置することで子どもが中に入った時にステンドグラスのような光を体験するように工夫し、部屋は花柄のある壁にした。さらに、屋根の縁に白の鼻紙で雪をもイメージされよく工夫されている。

イ 結果と反省

共同制作において分担作業と好ましい協力ができきばきとした活動になった。一人では上手くできない大きさの作品ができたことは、作り上げた達成感を一人ひとりが味わうことができ、ダンボールの素材のおもしろさも理解することができた。

(2) 事例2『ロケットハウス』(図3)

ア 教材としての工夫

細く伸びたロケットとは裏腹に、ずんぐりむっくりとしたコミカルなロケット型の家を表現した。家の壁は8面、屋根は正方形5面と三角形4面の9面での構造とした。屋根に大小さまざまな星型でくりぬいた



図3 ロケットハウス

入ったとき、より宇宙を感じられるよう工夫をした。

イ 成果と反省

グループでの協力と分担作業がうまくいき、制作途中にも様々なアイデアを検討しながら出来上がっていく過程がおもしろく楽しい作品にすることができ、大きな達成感が得られた。

子どもが楽しいと思える活動を議論する中、自分自身がおもしろいと思うことが大事であることに気づきがあった。

(3) 事例3『トランプハウス』(図4)

ア 教材としての工夫

子どもが2人はいて遊ぶことができる大きさであり、「不思議な国のアリス」のワンシーンからのイメージで制作をした。

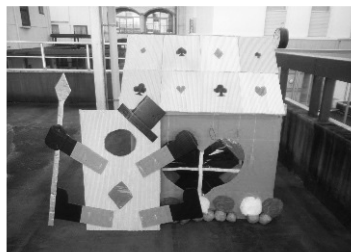


図4 トランプハウス

屋根にトランプの瓦を敷き詰め、窓をハートの形にし、ポップな感じを表現した。さらには、トランプの兵隊のオブジェを付帯させることで、より物語の中で子どもたちが遊べるように工夫をした。

イ 成果と反省

グループの中での柔軟なコミュニケーションがいろいろなアイデアを生み一人ひとりの得意なところを十分生かしながら作り上げていく楽しさを味わうことができた。

上手く作りたいという思いから積極的に取り組み、ダンボール工作のスキルを高めることにつながることができた。大変な作業であったが、作る楽しさを味わうことができ、さらに、他のテーマでダンボール工作をしたいという意欲を持った。

(4) 事例4『ライオンハウス』(図5)

ア 教材としての工夫

このグループは、時間をかけ細部にわたりアイデアスケッチを描きさらに具体的な制作プランが検討された。子ども2人が遊べる空間を確保しながら、入母屋の家をベースに子どもが思わず入りたくなるようなライオンが大きく口を開けた入り口を工夫した。



図5 ライオンハウス

ライオン作成に当たっては、ビニール紐で暖簾の様にし、ライオンの鬃は、はながみで作った花を利用した。さらに、家の外壁にはより興味を引くため側面には果物や動物を描き、裏面には時計を作り短針長針共に可動させ遊ぶことができるようにした。

イ 成果と反省

話し合う中で、初期のスケッチ(カバ)とは違った仕上がりになったが、制作に当たって個々のアイデアを共通理解しながら十分取り入れることができ、共同制作の楽しさを知ることができた。

(5) 事例5『マッシュRoom』(図6)

ア 教材としての工夫

大きなきのこを作ることで人間が小人になったイメージで制作をした。

ダンボールを部分的に二重にすることで強度を考え、さらにきのこのかさの部分を取り外しができるようにし、持ち運びにも留意した。特に工夫をしたところは、きのこの曲面を面取りで表現した点である。

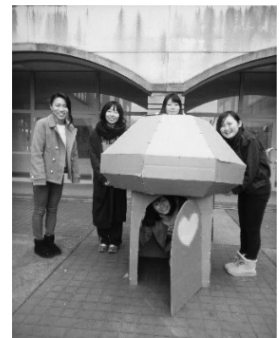


図6 マッシュRoom

イ 成果と反省

きのこのかさの部分に苦勞をした。特に、かさの重みに対するダンボールの強度を強化するための話し合いの時間を持ち、みんなで問題解決することの楽しさを知ることができた。子どもが楽しいと思うことは、大人自身もおもしろいと思って取り組むことが大切な事だと気づいた。

(6) 事例6『レゴブロックハウス』(図7)

ア 教材としての工夫

自分自身が良く遊んだレゴブロックで家を作った楽しい思い出をフィードバックさせて「実際にレゴの家には入れたらどんなに楽しいだろうか」という思いでブロックの形と色は、



できうる限り忠実に本物に近づけ制作された。特に屋根についてはレゴブロックが順序良く積み重なっているように見せるための工夫をした。

イ 成果と反省

素材の違うレゴブロックをダンボールで忠実に似せて作るかをみんなで話し合い一つ一つ決めていったことが非常に大切だと知ることができた。また、共通の思いを共有した上で制作すると完成した時の喜びが大きいと感じた。

(7) その他の作品例

事例以外の12作品についても幼児が興味関心を持つための造形要素を各グループでよく議論し、各自の役割が明確にされ充実した共同作業がなされ、どれもが完成度が高く工夫された作品となった。



図8 ツリーハウス

窓の形や色をセロハン等で装飾することで、ダンボールの中に外光を上手く取り入れ幻想的な空間を演出した作品(図8・9)やアニメのキャラクターそのも



図9 内部の様子

のを家として構築した子どもにとって関心のあるいいアイデアの作品である。(図12・18)

図10・11・17は、家に車、水族館、電子レンジ等の機能を持たせることで、より子どもたちが見立て遊びを可能にした作品であり、図13・14・15・16は、家の周囲や中にオブジェを装飾したスキルの高いディテールにこだわった楽しい作品である。

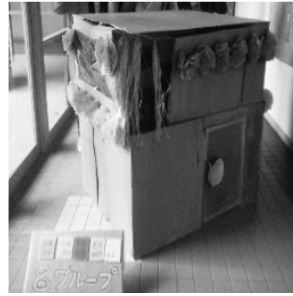


図10 トレインハウス

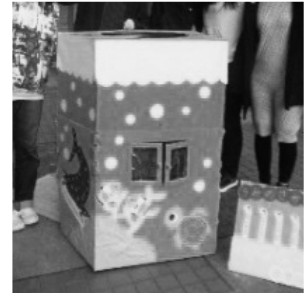


図11



図12 ツムツムカーニバルハウス



図13 ライオンハウスの部分



図14 レゴハウス



図15 ペロペロハウスの部分



図16 おもちゃのちゃちゃちゃハウス



図17 電子レンジハウス



図18 ととろハウス

5 結果と考察

身近であるダンボールを素材として家をテーマにした工作を体験した学生は、ほとんどが始めてであった。当初は、戸惑いや未経験からくる後ろ向きな声が多く聞かれたが、幼児期、ごっこ遊びをして楽しんだ自分にフィードバックしながらグループの仲間と様々なアイデアを検討し、イメージスケッチや設計プランを立て完成イメージができる頃には、作りたいという意欲が感じられるようになった。(図19)

制作に当たっては、材料の特性や道具の使い方等学ぶ点が多くダンボールの接合には木工ボンド、両面テープ、ガムテープを使用していたが、構造体として接合部分の強度を増すために結束バンドが効果的であることを知ることができた。さらに、締め付けた後の出っ張ったバンドの処理として、ガムテープや別のダンボールを貼ることで子どもたちが安全に遊ぶことの配慮に気づくことができた。

造形スキルについて、魅力的な装飾やディテールを工夫し、ダンボール以外の素材も取り入れ、子どもたちのイメージを膨らむようなオ



図19 制作の風景

ブジェを工夫しながら作ることで、ダンボールに対する扱いの技術面での向上につながった。

今後、同様の単元を実施するに当たっては、デザイン設計と共に材料設計に伴い材料調達も組み入れた演習展開ができれば、保育現場での即戦力につながると考える。



図20 学びの森フェスティバルの様子

演習終了後の学生によるまとめと反省では、「仲間と話し合い、イメージを共有しながら制作したことは、完成した喜びがより強く感じた。」「一人ではできそうに無いものがみんなと支えあって作る楽しさを味わうことができた。」さらには、「子どもたちが、こうすると喜ぶだろうと想像しながら作ることは、自分自身もわくわくして楽しかった。」と言った、前向きな感想がほとんどの学生から聞くことができた。

今回制作したダンボールハウス2点(図20)を“第12回学びの森フェスティバル(各務原)”に出展し参加した多くの子どもに好評であり学生の取り組んできたことの自信にもなり、その意欲は、次のダンボールを素材とした制作に活かされ、より見立て遊びやごっこ遊びに夢中になるようなスキルの高い作品となった。(図21・図22・図23)



図21 ガスコンロ



図22 マンドリン



図23 システムキッチン

6 おわりに

将来現場における保育士として子どもたちが生活や遊びの中で、興味あることや経験したこと等を見つけてその感動を言葉や体で伝えたり、絵に描いたりし自分なりに表現ができるよう支援することが重要であり、面白いと思える状況をつくることも具体的な支援であると思う。ならば、面白いと思える状況を作るためには、保育士自身が感動し表現力や発想力を高めることであり、日常の物事に常に関心を持つことを大切にしたいものである。

この身近な造形素材のダンボールハウスの実践は、学生自身が面白いと気づき複数の仲間と一緒に楽しんで制作し完成の達成感が共有できるものであった。

感性を豊かにし生き生きとした表現を引き出す支援は、日常の中で子どもが自らの感性に基づき気づきおもしろいと思える状況づくりをすることと、子どもの様々な気持ちや感動に共感ができ、保育士自分自身がおもしろいと感じて共に活動することが重要と考える。

引用文献

- 石倉ヒロユキ,(2007)「遊べるダンボール工作アラ・カルト」小学館
- 槇 英子,(2008)「保育をひらく造形表現」萌文書林
- 磯部錦司『新幼児と保育編集部』,(2013)「生活から生まれる新しい造形活動 子どもとアート」小学館
- 磯部錦司,(2014)「造形表現・図画工作」建帛社
- 渡辺一洋,(2014)「幼児の造形表現」ななみ書房
- 文藤賢之,(2014)「表現をするということ」手足の不自由な子どもたちはげみ 6/7No.356 社会福祉法人日本肢体不自由児協会
- 土屋明之,(2015)「論説 日常の中で光るものに気づくこと」日本肢体不自由教育研究会機関誌 肢体不自由教育218 社会福祉法人日本肢体不自由児協会
- 厚生労働省告示第117号「保育所保育指針」〈平成29年告示〉平成29年3月31日